

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 9 月 29 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	武 真祈子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
ブラジル、アマゾナス州、マナウス市
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
アマゾンの孤立林に「共存」する 3 種のサルの種間関係
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 28 年 8 月 6 日 ~ 平成 28 年 9 月 9 日 (35 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
国立アマゾン研究所, Wilson Spironello 博士
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)

写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。
別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

<研究の概要>

アマゾンというと、どこまでも続く熱帯雨林や雄大なアマゾン川など、野生の王国というイメージが強い。だが、報告者が対象としているのは、都市の中にぼつんと残された小さな森に生きるサルたちである。

国立アマゾン研究所 (INPA) のキャンパスには、2 科 3 種の新世界ザル (フタイロタマリ、コモンリスザル、キングオサキ) が生息している。これらのサルは、生息地を追われるなどの理由で人為的に導入されたサルたちである。報告者は、狭い孤立林の中で、限られた資源をサルたちがどのように利用し、共存・競争しているのかを、特に食物資源に着目して調べることを目的とした。

また本研究は、幸島司郎先生 (野生動物研究センター) が率いるフィールドミュージアム・プロジェクトに所属している。最終的な目標は、プロジェクトの目的である都市周辺の生物多様性保全や、都市住民を対象とした環境教育に貢献することである。

<今回の渡航目的>

前回にひきつづき 3 種のサルの追跡・行動観察・食物調査を行うことを目的とした。

<目的の遂行状況>

7 月の一時帰国でしきりなおし、短期集中で目標としていたデータをとることができた。前回 (2 月~6 月) の渡航で得たデータもあわせてまとめ、PWS 中間シンポジウム (9/12~9/15@京都) で発表することができた。

<滞在をふりかえって>

渡航前は、きちんと調査ができるか、また前回のようにうまくいかないのではないかと不安でいっぱいだった。着いて 4~5 日はネガティブな気持ちのままだったが、少しずつ前向きに活動することができるようになった。その大きなきっかけとなったのは、地元の人々 (タクシー運転手や、INPA の清掃スタッフ) が、報告者のことを覚えてくれており、再び現れたことをとても喜んでくれたことだった。つたないポルトガル語で一から関係を築いた人たちである。前回の渡航で得たものが確かにあったことに気付かされた。また、調査中にも、自分の成長を感じる瞬間があった。いったんサルを見失っても、その時の状況と果樹の位置などから行動を予測し、前よりも高い確率で再発見することができるようになっていた。全くうまくいかなかったと自分では思っていた前回の調査も、無駄ではなかったのだと感じた。

<平成 26 年 5 月 28 日制定版> 提出先: report@wildlife-science.org

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

他にも、一時帰国でたくさんの方から励ましを受けたこと、INPAのみなさんが自然に受け入れてくださったこと、アパートに子猫が住みついたことなど、様々な要因が支えとなり、なんとか日々を送ることができた。

そうして1日1日フィールドにでかけるうち、自然の中で生き物に向き合うことに対する純粋なわくわく感が少しずつ戻ってくるのを感じた。前回の渡航前に自分の中にあった奢り、前回の渡航で味わった挫折感と後悔、そういった邪念がいったんゼロに戻って、ようやく本当のスタート地点に立てたように思う。ここに至るまで、辛抱強く支えてくださった周囲の人々、そして、多くのことを学ばせてくれる自然に心から感謝をしたい。



給餌場でエサを食べるリスザルとサキ



フタイロタマリン

6. その他 (特記事項など)

渡航費、生活費の全面的なサポートをしてくださったPWSリーディングプログラム・コーディネーターの松沢哲郎先生、およびPWS支援室のみなさまに心から感謝申し上げます。